

郷土館 発 深山を訪れた人たち

海にゐる山恋しという人につげばや津具の旅寝がたりを

明治三十九年柳田国男は海辺の町で正月を迎えた。大勢と話をしていた者の中の一人が、「俺は海よりは山の方がよい」と言い出した。その折に詠んだのがこの歌であり、柳田はこの歌を絵葉書に書き津具の山崎家に出した。

歌を詠んだ二ヶ月前、明治三十八年の十一月、柳田は明治政府の役人として安城から稲武・津具・田口・海老・大海と旅する中で、上津具の親戚である山崎家に立ち寄った。山崎珉平の娘である敏子を見舞うためである。柳田は敏子を小さい時から知っており、敏子が大学に入る時には保証人になるなど、山崎家とは親密な関係にあった。その敏子が病気を理由に東京から津具に移ったため、柳田は旅の途中で敏子を見舞ったのである。見舞いの会話の中で敏子が、「毎日毎日どこかの海岸へ行ってみたいと言い暮らしている」と話したことを思い出し、柳田は歌を詠んで葉書を出したのである。

では、柳田国男と山崎珉平・敏子の間にはどのような関係があったのでしょうか。そのことを説明するために、もう一人著名人が登場します。矢田部良吉とい

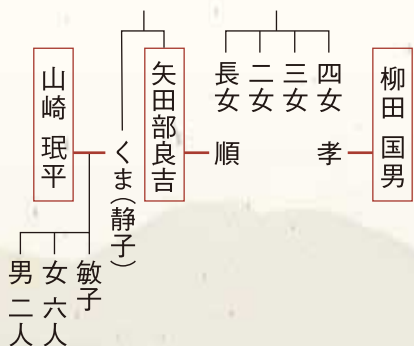
う人です。この名前を聞いてピンとくる人は、「あゝ朝ドラ『らんまん』に出てた人だ」と思いつくでしょう。矢田部良吉は、明治時代の植物学者としてとても有名で、牧野富太郎とも深い関わりがあった人です。

柳田国男・矢田部良吉・山崎珉平の三人の関係は次のようになります。

○矢田部良吉の妻(順)と柳田国男の妻(孝)が姉妹。つまり矢田部良吉と柳田国男は義理の兄弟となります。

○山崎珉平の妻(くま・のち静子)は、矢田部良吉の義妹(実際には従妹なのですが養子として矢田部家に入ったです)。

◎柳田国男は、山崎珉平にとって義理の兄の義理の弟になります。



上津具の山崎珉平は、若い頃東京で医師として開業していました。その時矢田部家と親しくなり、矢田部良吉の妹と結婚することになります。このような状況の中で、親戚関係にある山崎

家と柳田国男が関わりを持つようになりしました。ただ、柳田国男は山崎珉平よりも珉平の子どもたち(敏子とその姉妹兄弟)と親しく、敏子たちは「柳田のおじさん」と呼んでいたそうです。

上津具の旧山崎医院の敷地の一角にある歌碑の歌は、深山にある津具で暮らす敏子と東京都で暮らし民俗学を代表する柳田国男を結ぶ歌でもありました。

柳田国男の『ささやかなる昔』の中に次のような一文があります。

(敏子と話した翌朝、柳田は敏子が起きる前に山崎家を後にした)
：田口を後にして海老の町に近づくころに、馬の上でしきりにあの若い病人のことを考えていたことだけははっきりと記憶にある。後を振り返って見るたびに、左右の山々が鈴をかき合わせるように、だんだんと重なっていく、おまけに雲が来て真ん中を包むので、突き伏したいと思うほど悲しかったことをよく覚えて居る。

柳田国男…日本を代表する民俗学者 農商務省の官僚
矢田部良吉…植物学者

山崎珉平…医師 上津具の山崎医院(かめや)他

参考文献

『山崎珉平昔談』

佐々木克子・山崎譲一

『山崎家の歌碑と柳田国男』

文化したら二十六号 三浦茂美

(奥三河郷土館学芸員

渡邊 俊也)